思春期前期からの子どもを伸ばす育て方

野澤 征子
NPO法人キッズナビわかば副理事長

【のざわ せいこ】大阪府警察少年課で少年補導職員として、少年相談や街頭活動に従事。定年退職後、子育て支援のためのNPO法人キッズナビわかばを設立。訪問保育、病児保育、宿泊保育、家事手伝い、送迎など、子育てで困っているお母さんを支えるための補育活動を行っている。著書に『少年補導のプロが教えるしつけ100か条』（新風舎、2006年）がある。

子どもの可能性は無限大

子どもには自立し、人生を自分の力で切り開いて生きるたくましさを培ってほしいと、親なら誰もが願っています。

我が子が自分の家族と社会を大切に思い、他人を思いやれる大人に成長していくようにするには、親はどのようなときにどのような対応をすればいいのか――私が街頭で出会った子どもたちや、親から受けた相談内容などをもとに、小学校高学年から中学1・2年時の思春期前期の子どもの特徴的傾向への対応について考えてみたいと思います。

これからでも遅くない、無限の可能性をもっている子どもの力を伸ばす方法を一緒に考えてみましょう。

最近の子どもの特徴的傾向

テレビゲームやインターネット、携帯電話などが普及し、子どもの遊びや生活が変化しました。その結果、次のような傾向が特徴として挙げられます。

◎キレやすい

言葉より先に手が出てしまい、時には相手に傷を負わせてしまうことがあります。昨日の友も今日の敵にしてしまう勢いです。些細なことで感情が高まり、衝動的に相手を非難し攻撃します。相手を傷つけることに配慮せず、自分が傷つくことは極力避けようとするタイプです。

↓ このタイプの子どもへの対応は、家庭で子どもとの会話の時間を、できるだけ多くもつことです。幼児期からテレビやゲームに熱中して、一人で過ごす時間の割合が多く、家族との会話の機会が少なかったことが原因と考えられるからです。

遊びやけんかの体験が少なく、言葉のキャッチボールが訓練されていません。自分の気持ちを言葉で表現するのが苦手で、相手に気持ちを伝えることができないのです。子ども自身が獲得している言葉と、情緒的な安定とは深く関係します。短い時間でも子どもに多くしゃべらせましょう。親に認められたと感じて自信をもち、キレを回避できるようになります。

◎コミュニケーション能力の低下

理解力が乏しく、相手の主張を最初から理解しようとしません。小学校低学年では問題ないように見えますが、成長し集団への所属欲求や異性を求めるように

なったとき、相手と協調できないため、お互いを許しあえる友人や異性をつくれないのです。「親がだめだと言うから、自分はだめな人間なのだ」と自分を過小評価し、内発するエネルギーをため込んでしまうタイプです。

↓ このタイプの子どもには、小さな課題に取り組ませます。遂行するにつれ、自己を統制する訓練がなされ、自分に対する肯定的な感情をもつようになります。「自分はそれなりの能力と、よい面をもった大切な存在なのだ」という気持ちです。それなりの責任感や達成感をもつことで、コミュニケーション力に自信を深めていきます。

子どもに対し、「あなたは家族にとって大切な人」と言葉に出して繰り返し伝えてやりましょう。親のその言葉で子どもは自尊感情を高め、幸福感をもてるようになります。自尊感情が高くなれば、精神的に安定してきます。自律精神も旺盛になり、友だちとの関係においても積極的にコミュニケーションをとれるようになります。この時期にお互いを許しあえる友人をつくることは、生きていくために最も重要な条件のひとつです。

◎自己中心的

周囲の人をどれほど傷つけるか全く考えず、自己満足のため感情の赴くまま、「自分さえよければ」の考えで行動する子どもが多くなりました。その場の「好き嫌い」や「快・不快」で判断し、暇つぶしの遊び感覚やスリルを味わうゲーム感覚で行動するので、規範意識は低く、悪いことをして捕まっても、「運が悪かった」で終わらせようとするタイプです。

↓ このタイプの子どもは、親もその傾向をもっていることが多く、保身のため幼少期から刷り込まれているので、一番手間のかかる厄介なタイプです。

ちょっとしたことでも、「ありがとう。助かった」と感謝の言葉をできるだけ伝えていきましょう。反復することで、人と繋がることの温かさや、人のために役立つ喜びなど、周囲の人の気持ちも理解できるようになります。根気よく小さなことを積み重ね、それでも修正できなかった部分については子どものキャラクターとして認めてやらねばなりません。その後は、挫折を体験することで子ども自身が学んでいくでしょう。

親の態度で子どもは伸びる

◎しつけは九つまでに

親は子どもが何歳になろうと子ども扱いするのですが、その気持ちが通じるのは「つ」のつく年齢、「九つ」までと考えた方がよいでしょう。

九つまでに、子どもが理解できるよう細部にわたってあるときは厳しく、ある

ときは優しくしつけなければなりません。それ以後は次第に親の押しつけになり、「同じことを何度も言うのでうるさい」と言われるようになります。

残念ながら義務教育では、わずかに安全教室で交通ルールを学ぶ程度で、社会のルールを学習する機会がほとんどありません。子どもが社会と直結する状況にある今、家庭で社会のルールを教える必要があります。

２００４年佐世保市で起きた、小学6年女児のクラスメート殺害事件で、加害者の女児が「私はどうなるの？」と言ったと報道されていました。刑罰・法令に触れる行為をした14歳未満の子どもは、児童福祉法に基づき児童相談所へ通告されます。この女児は、児童相談所へ送られ、さらに事件の重要性から家庭裁判所に送致されました。家庭裁判所では観護措置の決定がなされ、少年鑑別所に収容されたのです。事前に、「罪を犯したら、罪に見合った償いを必ず負わなければならない」ことを知っていたら、女児は殺人という行為に走ったでしょうか。社会のルールを、自然な形でしつけに取り入れていってほしいものです。

◎子どもの気持ちに添う

子どもが成長すると、しつけが押しつけにならないよう心がけましょう。

例えば、子どもが学校で教師から叱られたと言って帰宅したとき、親が一方的に「それはあなたが悪い」と、教師と同じ目線から注意をすると、子どもは自分を分かってもらえない、親は味方ではないと戸惑い、自分の殻にこもってしまうでしょう。

このようなときに、叱られる原因やそのときの子どもの気持ちを聞いて、「なるほど、そうだったのか」と事情を受け容れてやり、教師に対して主張できなかった子どもの気持ちに寄り添ってやりましょう。親が戸惑ったり、世間体を気にして親の立場だけで叱責したら、子どもは二重に傷つくことになります。また、子どもが自分の意に反して親に叱られたり、叱られることが重なってくると、自分が傷つくのを回避するため、親の意に添った答えをするようになります。言い訳や嘘が多くなり、歪んだ形の親離れ、自立へと向います。

子どもの虚言癖は、親の強い叱責が大きな要因です。親が受け容れてやれば、子どもは情緒的に安定し、社会的に望ましい行動をとるようになります。子どもが自分の考えや気持ちを家庭のなかで、十分出せる雰囲気を日ごろからつくってやりましょう。

◎「待つ」ことで伸ばす

子どもが、それまでと違って寡黙になったとき「どうしたの？」「何かあったの？」など、細かいところまで詮索することは好ましい対応とは言えません。

小さいときは、子どもの行動や友だち関係がよく分かり、親は安心できました。成長とともに、子どもの交友関係も行動範囲も、子どもが「今、どんな思いでいるのか」さえ、親から見えにくくなります。このようなときも、子どもが言葉を発するまで親が「待つ」姿勢が重要です。

待つには子どもを信じることが大切で、親が不安をもったり、取り越し苦労しては待つ態度はとれません。親の待つ態度から、子どもは「自分は親に大事にされている」「親は頼りがいがある」と、自信とやる気を強くし、そのことが子どもの情緒や創造性によい影響をもたらします。どこまでも信じてやると、子どもは親を裏切ることができません。安心して自由な意思で行動させ、豊かな創造性を伸ばしてやりましょう。

親子の信頼関係

◎親の行動を説明する

私たちＮＰＯ法人キッズナビわかばでは、親が子育て講座を受講している間、主催者の依頼で、子どもの集団保育を行っています。参加する親のなかには、保育担当の私たちに子どもと荷物を渡し、講座へ急いで行こうとする人がいます。その子どもは親が戻ってくるまで泣き続

けます。

子育てに関する講座に熱心でも、講座を受講する度に子どもを不安のどん底に押しやっていることに気づかないようです。心のどこかで、「自分の子はまだ何も分からない」と決めつけているところがあるのでしょう。泣いている子どもは、「親は急にいなくなるのだ。一人ぼっちでこわい」「もっと掴まえていないといけない」と、親から離れようとしません。いつも不安でいっぱいなのです。緊張し委縮した子どもは、伸びる力をなくしがちです。

私たちは、保育の受付時に識別のため子どもの名前を記入してもらいます。このとき、子どもを連れてきた親に、「必ず子どもの目を見ながら、《今から、お勉強してくるから、ここで待ってるのよ。終わったら戻ってきて一緒に帰るから、ここで待っててね》と、気迫を込めて言ってください。戻ってきたときは、《ありがとう、賢かったね。一緒に帰ろう》と言ってください」とお願いしています。

親子の信頼関係が大切だと学習しても、頭で理解しているだけで、生活のなかに活かされていなければ、親が勉強することは子どもにとって迷惑です。

子どもの脳の重さは生まれたとき約380グラム、3～4歳で大人の8割は成長していると言われます。15歳くらいで大人の脳の重さに達します。大人の脳の重さは約1500グラムです。言葉を理解できない乳幼児でも、親が気迫を込めて語りかければ、「大変なときである雰囲気」を理解することはできるのです。信頼はこの小さな積み重ねがあってうまれ、強い絆へと育っていきます。子どもが中学生に成長した後も同じです。親の生活や行動を話してやりましょう。

◎話の聞き役にまわる

子どもは新鮮な感動や、その日にあった出来事を驚きの気持ちで親に話します。親からすると興味のない話だと聞き流していると、子どもは心を閉ざすようになります。不自然な親離れが始まり、発達不相応に早く自立していくので、聞き役にまわる配慮が必要です。私がかつて関わったA子さんのケースを例に挙げましょう。

円満な家庭に育った13歳のA子さんが「大好きだったお母さんが自分の話を聞いてくれなかった。もっと話を聞いてほし

かった」と、日記に書いていました。ニコニコしている母親にクラスメートの女の子の話を始めると、父親の仕事を手伝って忙しい母親には「もう、いい加減にして」といつも言われたと書いていました。

A子さんは寂しさをメールで知り合った無職少年K君16歳に話すようになり、2学期のはじめ2人そろって家出をしてしまいました。A子さんは家出中、K君に誘われるまま、夜の街を遊びまわっていました。1カ月後、両親がA子さんに会ったときには、「2人で一緒にいたいから、学校をやめる」と言い出しました。かたくななA子さんの態度に両親は、「これが我が子かと驚いた」と言います。

私と両親とA子さんとの関係は、その後A子さんが高校を中退して17歳で結婚し、子どもを出産した後も続きました。A子さんの父親は、「今考えるとこれでよかったと思いますが、あの子が中学1年のとき、もう少し話を聞いてやれていたら、A子も違った人生を歩んだのではないかと思うと、ときどき辛い気持ちになります」とよく言っていました。

子どもは親の都合を待ってくれません。日々成長している子どもの生きるエネルギーは、親を超え、時には命をかけて突き進むことさえあり得るのです。子どもの心を軽んじると、後で思いもよらない「つけ」がまわってくることになります。豊かな自立へと導くのは話を聞いてやり、気持ちを肯定してやる親の態度です。

家がおもしろくない小学生

私たちNPO法人キッズナビわかばでは、年間15日間ぐらい、深夜の夜回りを実施しています。そこで小学生に出会うことがまれにあります。家を出てきた理由を尋ねると、「家がおもしろくないから」と平然と言うのですが、私たちはその心理を理解できませんでした。

しかし、この子どもたちを許容する社会が現実としてあるのです。子どもが成長したからと言って、親が子どもの行動に無関心になったり、子どもの行動に親が責任をもたないような態度をとると、子どもは外に居場所を求めるようになります。

家族関係が希薄になり、我が子を愛せない親や親を信じられない子どもたちがいることは残念ですが、子どもへの対処も風邪をひいたと思ったらすぐ医者にかかるのと同じです。子どもが親と一緒にいることを何となく避けるようになったり、ちょっと注意するとふてくされたり、子どもの気持ちが理解しにくいとき、また、家の手伝いをしなくなったり、家族との会話にわざと入らず隠れてメールや電話をしたり、子どもの気持ちが勉強から離れ、遊びや他に関心が移っていると感じたら、親が感じていることを子どもに伝え、せめて相談機関に相談することくらいは行ってほしいものです。

さらに、小遣いの使い方が荒っぽくなってたびたび親にせびったり、キョトキョトして態度が落ち着かなくなったり、成績が急激に下がるなど、子どもの生活態度が明らかに変化し、法律に違反することやリストカットなど危険な兆候があるときは、悩んだり放置せず、両親で相談機関に相談してください。その後に、子どもが、自分の家族と社会を大切に思い、人生を自分の力で切り開いて生きるたくましさを身につけるよう、前述の対応を根気よく実践し、親の責任を果たしてほしいと願っています。